

既存の学問の枠組みを超え、 情報社会における新たな「教養」を創造

求む！「学際」を目指し、「いま」と向き合う者
情報コミュニケーション研究科が目指すのは2つのことです。

21世紀に入り、高度情報社会は急速に発展を遂げつつあります。その有用性は否定すべくもありませんが、それと同時に新たな社会問題や喫緊の課題も生じており、広範で高度な判断や対応が求められています。情報コミュニケーション研究科では、高度情報社会における人間とコミュニケーションの態様を、学際的に探究することを目指しています。

学際的あるいは領域横断的という考え方は、言うのは簡単ですが実現するのはなかなか難しい理念です。単に、「さまざまな分野の専門家」が寄り集まるのではなく、一人ひとりが特定の学問の核を持ちつつ、関連分野にも精通することが必要です。

学問は現実と遊離しては意味をなしません。単なる机上の空論や先人の思想の追従に終わることなく、現実あるい

は世界・社会の「いま」としっかり向き合っ、立ち向かう姿勢が求められます。政治的・経済的にも思想的・学問的にも閉塞感が漂ういまこそ、こうした状況を打破する新しい視点、いわゆる「科学革命」が求められています。

本研究科は、2019年に開設10周年を記念し、シンポジウム「現代社会と向き合う 国際化と多様性」を開催しました。取り上げたテーマはフェイクニュースや移民問題、舞踊等広範にわたり、本研究科の学際性を具現化するとともに、複雑化する社会の「いま」を象徴するものであったと言えるでしょう。

情報コミュニケーション研究科では、「学際」を目指し、「いま」と向き合う人材を求めています。

情報コミュニケーション研究科の人材養成 その他教育研究上の目的

高度情報社会の進展に伴い社会や社会が抱える問題は複雑化の一途をたどっているにもかかわらず、アカデミズムは、それに対する十分に有効な処方箋を提示するには至っていない。情報コミュニケーション研究科では、各分野の専門家が問題意識や提案を持ち寄り、「情報コミュニケーション」という視点から、複雑化した高度情報社会を様々な角度から検討した後に再び自己の専門領域にフィードバックできる「場」を創設することを目的とする。すなわち、教育の面においても研究の面においても「パラダイム転換型」又は「パラダイム創出型」の研究科となることを目指す。

情報コミュニケーション学専攻の人材養成 その他教育研究上の目的

高度情報社会の諸課題に取り組むために、情報コミュニケーション学専攻では、既存の専門研究によっては全体像がとらえきれなかった21世紀の諸問題を、学際的・領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる確固たる判断基準を持った研究者や実務家の養成・輩出を目指す。そのために、専門的なディシプリンの習得と並行して、早い段階から学生を研究プロジェクトに参画させ具体的な問題への学際的アプローチを実践させる。博士前期課程では、そうした学際的・領域横断的な視野と高度な専門的知識を有する人材を養成し、研究者に限らず社会に活躍しうる社会人の養成も目指す。博士後期課程では、それぞれの研究分野の更なる深化を図りつつ、学際的・領域横断的な視野をもって自らの専門分野で活躍できる研究者を養成する。

入学者受入方針

【博士前期課程】

情報コミュニケーション研究科博士前期課程は、既存の専門研究によっては全体像が捉えきれなかった21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる判断基準を有する実務家の育成を目指し、また研究者育成の基礎となるこれらの方法論と知識の獲得をはかります。このため、本研究科では主に次のような資質や意欲を持つ学生を積極的に受け入れます。

- (1) 学部で学んだ情報コミュニケーション学をより高度に発展・展開したいと希望する者。
- (2) 自分自身の問題意識との関係で、従来の学問体系を踏まえて、さらに学際性を修得したいと考えている者。
- (3) すでに公務員として行政に携わっている者、NGO・NPO、民間企業等の各種団体に属する者をはじめとする社会人で、自己の職業上の体験から、問題の本質を見極めたい、あるいは少しでも実際に生かし役立てることのできる解決法を探りたいと希望し、当研究科を修了した後にその成果を再び自己の職業に生かしたいと考えている者。

以上の求める学生像に基づき、学内選考入学試験、一般入学試験、外国人留学生入学試験、社会人特別入学試験、3年早期卒業予定者入学試験を実施し、入学者選抜を行いません。

なお、修得しておくべき知識等の内容・水準は以下のとおり求めます。

- (1) 人文・社会分野や自然科学における研究活動に必要な基礎的な知識。
- (2) 学際的な分野に取り組める柔軟な思考力及び広い視野。

Admission Policy

【博士後期課程】

情報コミュニケーション研究科博士後期課程は、既存の専門研究によっては全体像が捉えきれなかった21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる確固たる判断基準をもった研究者や実務家の育成を目指しています。このため、本研究科では主に次のような資質や意欲を持つ学生を積極的に受け入れます。

- (1) 21世紀の諸問題に関心を持ち、学際的・領域横断的に把握・定式化する意欲があり、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる技能を有すると認められる者。
- (2) 「情報コミュニケーション」という視点を理解し、複雑化した高度情報社会への処方箋や問題意識を研究科の「場」に持ち寄り、スタッフや他の学生とともに、パラダイムの転換や創出に果敢に挑戦しようとする気概にあふれ、協調したコミュニケーションが実践できる者。

以上の求める学生像に基づき、一般入学試験、外国人留学生入学試験を実施し、入学者選抜を行いません。

なお、修得しておくべき知識等の内容・水準は以下のとおり求めます。

- (1) 博士前期課程の教育・研究を通して、博士後期課程での研究活動を行える十分な研究能力及び応用的な知識。
- (2) 博士論文執筆に向けて必要となる理論的及び実証的な分析力。



情報コミュニケーション研究科Webページ

明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科

検索

事務取扱時間（グローバルフロント5F）

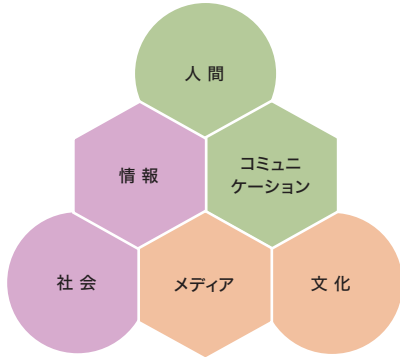
平日▶09:00~11:30/12:30~18:00 土曜日▶09:00~12:30 電話▶03-3296-4285 Mail▶jokomiken@mics.meiji.ac.jp

※休業期間やイベント等により事務取扱時間は変更となる場合があります。

カリキュラム

情報コミュニケーション研究科は新しい「学際」のあり方に基づいて、教育課程を編成しています。その特色は、学際研究への参加、学際的な教育・研究成果の発信、そのために必要な研究技法の習得、という3つの柱です。

『学際空間』としての専門領域研究



学際研究への参加

「学際」研究は、過去の学問的な蓄積をきちんと踏まえることなしには実践出来ません。従って情報コミュニケーション研究科では、まず大学院生に、「社会」「文化」「人間」のいずれかの領域に拠点を置き、自らの核となる知識や研究手法を身に付けてもらいます。その上で「社会」「文化」「人間」の3つの専門領域を底辺に、「情報」「メディア」「コミュニケーション」の各領域へと展開する「学際空間」の内部で、それぞれが興味と問題関心を抱くテーマについて、他領域の知的資源も活用しながら自由に、そしてアカデミックに研究することができます。

学際的な教育・研究成果の発信

学際的な教育・研究成果を広く発信するために、大学以外の諸機関とも連携を図り、開かれたアカデミズムを学際共同研究プロジェクトとして設置しています。大学院生はこのプロジェクトのいずれかに参加可能であり、そこで今日的な課題の解決に学問的に取り組み、研究成果を発信する場を持つことができます。

学際研究のための技法の習得

以上のような学際研究や活動に必要な研究技法を教授する、「集約型外国文献講読」(英語・ドイツ語・フランス語)、「フィールド・アプローチ」「アカデミック・ライティング」「専門社会調査」といった研究サポート科目群を設置しています。

■ 博士前期課程 科目一覧			
テーマ・カテゴリー			研究サポート
情報・社会	メディア・文化	人間・コミュニケーション	
行動経済学、公共政策、メディア技術と社会、情報科学、知的財産法、国際関係論、現代政治学、組織社会学、経済社会学、ジャーナリズム論、現代型犯罪と刑法、社会システム論、情報法、科学と社会、開発経済学、憲法史、イノベーションの実証分析、学校社会学、災害社会学、環境行政法	社会文化史、メディア社会史、比較文学・比較文化、表象文化論、ジェンダー論、超越文化論、宗教と政治、マルチ・カルチャリズム、科学史・科学哲学、都市・空間論、演劇学	組織コミュニケーション論、認知情報論、説得コミュニケーション論、家族社会学、異文化間コミュニケーション、生命論、人類学と意識科学、現代思想論、社会的人間学、公共圏・親密圏コミュニケーション、心理学の哲学、社会心理学、言語学	集約型外国文献講読(英語・ドイツ語・フランス語)、フィールド・アプローチ、アカデミック・ライティング、専門社会調査

※ 2024年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。

■ 博士後期課程 科目一覧			
年次	必修科目	共通必修科目	
1年次	研究論文指導I 春学期 2単位 / 研究論文指導II 秋学期 2単位	情報コミュニケーション学際研究I 春学期 2単位 / 情報コミュニケーション学際研究II 秋学期 2単位	情報コミュニケーション学際研究II 秋学期 2単位
2年次	研究論文指導I 春学期 2単位 / 研究論文指導II 秋学期 2単位	情報コミュニケーション学際研究I 春学期 2単位 / 情報コミュニケーション学際研究II 秋学期 2単位	情報コミュニケーション学際研究II 秋学期 2単位
3年次	研究論文指導I 春学期 2単位 / 研究論文指導II 秋学期 2単位	情報コミュニケーション学際研究I 春学期 2単位 / 情報コミュニケーション学際研究II 秋学期 2単位	情報コミュニケーション学際研究II 秋学期 2単位

※ 2024年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。

教育課程編成・実施方針

Curriculum Policy

【博士前期課程】

情報コミュニケーション研究科博士前期課程の教育理念・目標である、新しい学際性・学域横断性に基づいた教育研究を実現するために、以下に示す方針に基づきカリキュラムを編成しています。

- 本研究科が目指す学際性は、社会科学・人文科学の融合を基盤とした上で、自然科学との協働を構築し得る教育・研究環境によって保証されます。このため本研究科で設けられる講義科目群は、社会、文化、人間の3つの伝統的研究領域をもとに、情報、メディア、コミュニケーションの3つの専門領域にわたり横断的に配置され、先進的な学際空間が形成されています。
- 知識を応用し総合的に問題解決や政策立案ができる能力を育てるための、基礎的なリテラシーやスキル、特定の研究分野で要求される技能の習得や資格の取得を支援するための研究サポート・プログラムを設置します。

以上の教育プログラムを通して、大学院生に専門的な知識を教授し、また、指導教員と副指導教員の連携による指導を行います。

【博士後期課程】

情報コミュニケーション研究科博士後期課程では、本研究科博士前期課程の教育理念・目的に加え、「先端研究」「ネットワーク化」の2点を重点課題とし、「学際」研究を具体化するために、以下に示す方針に基づきカリキュラムを編成しています。

- 本研究科が目指す学際性は、社会科学・人文科学の融合を基盤とした上で、自然科学との協働を構築し得る教育・研究環境によって保証されます。このため本研究科で設けられる講義科目群は、社会、文化、人間の3つの伝統的研究領域をもとに、情報、メディア、コミュニケーションの3つの専門領域にわたり横断的に配置され、先進的な学際空間が形成されています。
- 研究者として自立するために必要な基礎的なリテラシーやスキル、特定の研究分野で要求される技能の習得や資格の取得を支援するための研究サポート・プログラムを設置します。

学位授与方針

Diploma Policy

【博士前期課程】

情報コミュニケーション研究科博士前期課程は、21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に問題解決できる研究者や実務家を輩出することを目指しています。この人材養成目的を踏まえ、本研究科の定める修了要件を満たし、かつ、学業成績ならびに学位論文から、以下に示す資質や能力を備えたと認められる者に対し修士(情報コミュニケーション学)の学位を授与します。

- 既存の専門研究によっては全体像が捉えきれなかった21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる確固たる判断基準をもつことのできる資質や能力。
- 高度に専門的な業務に従事するに必要な研究能力及びその基礎となる学識。

【博士後期課程】

情報コミュニケーション研究科博士後期課程は、21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に問題解決できる研究者や実務家を輩出することを目指しています。この人材養成目的を踏まえ、本研究科の定める修了要件を満たし、かつ、学業成績ならびに学位論文から、以下に示す資質や能力を備えたと認められる者に対し博士(情報コミュニケーション学)の学位を授与します。

既存の専門研究によっては全体像が捉えきれなかった21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる確固たる判断基準をもつことのできる高度の資質や能力。

履修モデル紹介

真の「学際」研究をシミュレーション

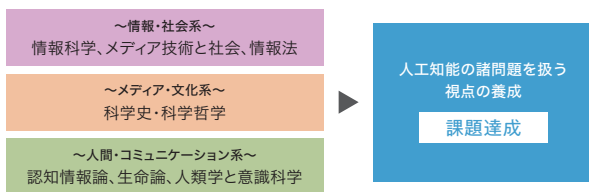
具体的な課題に対して、情報コミュニケーション研究科が用意する3つのテーマ・カテゴリからどのような科目を選び、どのように多面的なアプローチを行いながら、「学際」研究を実践していくのかシミュレーションしてみましょう。

事例1 人工知能

近年の技術革新により、人工知能の性能が格段にあがり、2045年には人工知能が人間の知能を大きく凌駕し、人間の仕事のほとんど全てが人工知能に置き換わる「シンギュラリティ」の時代が到来するとまで言われています。私たちは、人工知能と人間が共存する社会について、考えなければならない時期が来ているでしょう。

本研究科では、「情報科学」によって人工知能技術の基本をおさえ、「メディア技術と社会」で技術による社会変化を扱います。また、「情報法」では人工知能が暴走したときの法的問題を、「科学史・科学哲学」では科学技術の進歩と人間社会の関係を歴史的な時間軸で俯瞰します。さらに、「認知情報論」では人工知能と人間の思考の相違点を明確にし、「生命論」では機械に生命が宿る可能性を探る手がかりを学びます。「人類学と意識科学」では脳の仕組みと人間の営みを通して機械的人間観の問題を探ります。

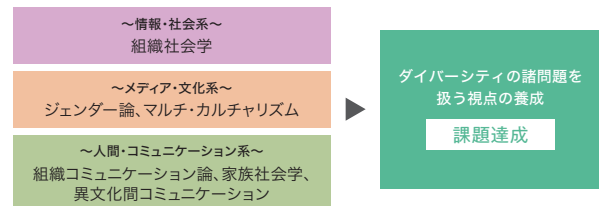
まさに人工知能の諸問題を射程においた学際的な視点を築くカリキュラムが備わっています。



事例2 ダイバーシティとともに働く

安全やよりよい生活を求め、人々はかつてないほど大規模に国境を越えて移動しています。日本も例外ではなく、仕事や教育のために国外に行く者、逆に仕事や留学で来日する者が増えています。また、日本では少子高齢化による労働人口の減少により外国人や女性、高齢者の活躍が期待され、私たちが働く場はかつてないほどダイバーシティに富んだものになるうとしています。

本研究科では、「ダイバーシティとともに働く」ことにまつわる諸問題を学際的に学ぶことができます。「組織社会学」や「組織コミュニケーション論」では、組織文化や組織における対人コミュニケーション、動機付けなどの組織や組織における行動について、「ジェンダー論」では、ジェンダーがいかに私たちの文化・社会の中で構築されていくのかを学びます。「家族社会学」では、女性の移民や労働、それに伴う家族への影響、そして「異文化間コミュニケーション」では、異なる文化的背景を持つ者同士が接触・協働する場面に起こりうる諸問題を扱います。



院生からのメッセージ

博士前期課程

Master's Program



村上 詩歩

MURAKAMI Shiko

情報コミュニケーション学専攻
博士前期課程 2年

学際的で自由な研究を

私はこの研究科で「傷痍軍人の家族」をテーマの中心に据えて研究をしています。今でこそ自分の研究が歴史学の中に位置づけられることを自覚していますが、まだテーマの輪郭がはっきりしない頃は不安に思うこともありました。しかし、実際は研究テーマの一つの学問の枠に当てはめる必要はありません。そのことをこの情報コミュニケーション研究科に入ってから知りました。私の研究テーマは社

会文化史・民衆思想史の知識を必要としますが、同時に家族社会学の知識やメディア社会学の手法も必要とします。このように複数の領域に及ぶ研究に取り組むには、「学際」研究を特色に掲げたこの研究科が一番だと思います。既存の体系に囚われない研究にこれから皆さんと共に挑戦していくことが出来たら嬉しいですね。

Q 師事している教員は？

A 須田 努 教授

社会文化史・民衆思想史をご専門とする須田先生の元で研究をしています。ゼミでは研究テーマに沿った史料分析と並行して、研究に必要な時代背景を理解するための知識や方法論についても学びます。毎週、史料を読んでその解釈を教えてください、研究の進捗状況について相談に乗っていただきたいと思います。

教員情報 P.092

博士後期課程

Doctoral Program



大塩 浩平

OSHIO Kohei

情報コミュニケーション学専攻
博士後期課程 2年

Chatbotが広げる法の可能性

日本の伝統的法システムには限界がきざり、世界的な潮流であるAIを中心とした先進技術による変革が避けられない状況となっています。私の研究は、ODR（オンライン紛争解決）における法的交渉支援や調停サポートを目的とした、自動応答Chatbotシステムの開発や、社会実装を目指すものです。Chat GPTのようなブラックボックス生成AIとは異なり、法学の知識をベースに、生物学や心理学、

経済学、交渉学等をシステム内へ適切に落とし込むことで、学際的な文脈から社会問題の解決を目指します。法学研究科の博士前期課程在学中から学会発表や論文投稿を行い、自身の研究を客観的に批評してもらい、そこで培ったネットワークを通じて、弁護士や裁判官へのリサーチも研究に取り入れています。

Q 師事している教員は？


A 石川 幹人 教授

石川先生の研究室では、AIを用いた自然言語処理について学んでおり、特に自然言語処理分野のTransformerや、それを応用したBERTと呼ばれる言語モデルを正確に理解し、実装することを心掛けています。上記の技術を活用し、Chatbotでの法的交渉や調停時に必要となる言語技法の再現や拡張を目指します。

教員情報 P.092

授業科目ピックアップ「学際」研究を实践

情報・社会系



知的財産法

本研究室の研究テーマは「知的財産法」です。「知的財産」の法分野は、普通考えられるよりも、相当に広い範囲をカバーしています。発明という技術思想を保護する特許法、小説や音楽などの創作的表現を保護する著作権法はもちろん、有名人に備わる顧客吸引力を保護するパブリシティ権なども知的財産に含まれます。本研究室での研究は、実定法の解釈論が基礎とはなりますが、「価値ある情報」のうち何を「知的財産」として保護すべきなのか、ということ自体も問題とするので、立法論も展開します。何のために知的財産の保護が正当化されるのか、その保護は人類を裨益しているのか、といった根本問題も視野にいれて深みのある研究を行いましょ

今村 哲也 教授
IMAMURA Tetsuya

メディア・文化系



メディア社会史

電話を発明したのは誰か？ メディア史を学んだ者であれば即答できないでしょう。実際、グラハム・ベルは電話に必要な技術の特許を最初に申請したものの、今日我々がイメージする「電話」というメディアを想定したとはいえません。メディアの実現には技術が必要ですが、その具体的な用途を決定するのは社会です。メディア史とは、技術と社会の相互作用的な関係を理解することにほかなりません。この授業では、これまでのメディアの成り立ちを社会的な視点に基づいて講義します。ほぼすべてのメディアの成り立ちを俯瞰し、メディアの(いま・ここ)を理解しましょう。もちろんそれは、メディアの(これから・どこ)を考えるためです。

江下 雅之 教授
ESHITA Masayuki

人間・コミュニケーション系



説得コミュニケーション論

本研究室では、社会論争から映画批評までを扱うメディア批評の方法論を学びます。レトリック分析では、どのように公的言説が社会的コンセンサスを形成し、人々の協調行動を促すように歴史の転換点で選択に影響を与えたかを研究します。また大衆文化を「政治的闘争の場」と考えるカルチュラル・スタディーズでは、利害関係を持った発信源からの「暗号化」された意味をそれぞれ異なった立場の聴衆が「解読」というリテラシーの問題を考えます。例えば、ジェンダーやステレオタイプは「社会的現実」に過ぎないにもかかわらず、そうした現実の人々が参加することで影響されます。フェイクニュース時代のメディア・テキストを批判的に研究してみましょう。

鈴木 健 教授
SUZUKI Takeshi

研究サポート



集約型外国文献講読 (ドイツ語)

研究は日本語と英語で十分というわけにはいきません。少なくとも人文・社会科学の領域で研究するならばこれは三つの点で誤っています。確かに多くの重要な研究は英語が日本語に翻訳されていますが、研究の世界では翻訳に依存しては面白く新奇なものに出会えません。また、専門によりますが、個別の言語を習熟し、テキストを生きたかたちで理解することは大事です。そして、なによりも大学(university)の理念は、普遍性(universality)にあります。あらゆる知を包括しうる場所が大学であり、その基本言語が限定されていいわけありません。面白い研究に出会うためにも、英語以外の外国語の習熟は必要です。

宮本 真也 教授
MIYAMOTO Shinya

2023年度 修士論文テーマ

- ▶ 学校教員の役割葛藤と多忙感に関する社会学的考察
—現代日本の教員を苦しめる要因の解明を目指して—
- ▶ ソーシャルメディアにおける救助要請の発信
—新型コロナウイルス時期武漢封鎖された被災者の発信された救助要請を例として—
- ▶ 独自化しつつある中国アイドル文化
—アイドルオーディション番組「創造営2021」を対象として—
- ▶ 「朝日新聞」における突発的な公衆衛生事件に対する報道傾向
—H1N1と新型コロナ報道の比較分析—
- ▶ 中国のSNSにおけるファンダム・ナショナリズムに関する考察
—「飯圈女孩出征」事件を中心に—
- ▶ 2.5次元ミュージカル『テニスの王子様』における舞台演出
—1stシーズンと3rdシーズンの比較—
- ▶ 中国における専業主夫の実態と男性性の再構築
- ▶ 中国農村社会の娘差別に関する考察 —農村出身で弟がいる娘の事例を通して—
- ▶ 外資系企業において元留学生外国出身社員と日本人社員が経験する葛藤に関する研究
- ▶ ムスリムの集住とモスクの役割 —千葉県行徳エリアの調査から—

近年の博士学位授与

課程博士

学位の種類	論文タイトル	授与年度
博士(情報コミュニケーション学)	横光利一による日本近代小説の心理改革 —視覚中心主義に根差した「意識」から触覚中心主義に依拠する「情動」へ—	2021年度
博士(情報コミュニケーション学)	現代日本社会における母親規範とその画一性に関する研究 —ギャルママのファッションと育児を事例に—	2021年度
博士(情報コミュニケーション学)	非近代的社会における監視実践 —統治の技法から自己の(配慮)へ—	2021年度
博士(情報コミュニケーション学)	ライフコースからみる現代中国女性の親子関係と家族意識 —浙江省紹興市に在住する一人娘の例を通して—	2022年度
博士(情報コミュニケーション学)	大学生の異文化接触とキャリア発達:異文化アジリティを育む海外インターンシップの意味	2023年度

情報コミュニケーション研究科

情報コミュニケーション研究科の研究プロジェクト

情報コミュニケーション研究科では、学際的で独自の研究を志す大学院生を広く募集していますが、以下に示す研究プロジェクトに参加しながら、研究を進めることもできます。

参加希望者は、該当研究プロジェクトを担当する研究指導をもつ教員にコンタクトしてください。

なお、研究プロジェクト参加にあたっては、プロジェクト関連科目に関する知識や、参考文献の理解が必要となります。

現代アメリカ研究

担当教員 清原 聖子 教授 鈴木 健 教授

- 研究テーマ
- 現代アメリカの“分断”に関する学際的研究
 - 大統領選挙キャンペーンの研究

- 活動実績
- 明治大学現代アメリカ研究所、2021年度明治大学大学院研究科共同研究「コロナ禍のアメリカにおける政治コミュニケーションの変容」
 - 2021年度大学院情報コミュニケーション研究科フォーラムにて研究発表 (https://www.meiji.ac.jp/dai_in/infocom/forum2021.html)
 - 2022年度大学院情報コミュニケーション研究科フォーラムにてパネル討論に登壇 (https://www.meiji.ac.jp/dai_in/infocom/forum2022.html)

関連科目 現代政治学 / 説得コミュニケーション論 / 研究科間共通科目学際系総合研究A(P.188)

メッセージ 本研究プロジェクトでは、本研究科の担当教員だけでなく、他学部の教員とも連携して現代アメリカの「分断」を学際的な視点から問う試みを行っています。また、大学院授業や研究会、シンポジウムなどを通じて、2024年アメリカ大統領選挙に向けて、大学院生の皆さんと活発な討論を行いたいと考えています。現代アメリカ政治・社会に関心のある院生の皆さんは、ぜひ積極的に研究活動に参加してください。

越境と家族

担当教員 根橋 玲子 教授 施 利平 教授

- 研究テーマ
- 日本で就労・生活している外国につながる人々に関する研究 (子どもの教育戦略 / アイデンティティ / 日本の職場文化と適応 / ライフコースの多様性と定住 / 定住・帰国の選択 / 世代間関係と結婚・出産 / 日本の移民政策 / 多文化共生社会)

- 活動実績
- 日本で働く高度外国人材の多文化アイデンティティモデル: ダイバーシティ経営に向けて (科研費基盤研究(C)2020~2023)
 - 明治大学国際・ダイバーシティ教育研究所 <https://sites.google.com/view/meiji-university-riide/>

関連科目 異文化間コミュニケーション / 家族社会学

メッセージ グローバル化の進展に伴い、地域や国を越えて移動する個人や家族が増えています。移動の動機や原動力は何か、移動先(ホスト社会)での問題や課題は何か等を一緒に研究してみませんか。

科学・社会・コミュニケーション

担当教員 石川 幹人 教授 蛭川 立 准教授 宮本 真也 教授

- 研究テーマ
- 疑似科学広告を用いた消費者リテラシー教育
 - ハイパーメリトクラシー時代における疑似科学
 - 命の選別と価値づけ〜人格の承認と優生思想
 - 疑似科学信奉の認知心理学的背景
 - 日本における補完代替医療の受容と現状

- 活動実績
- 疑似科学を科学的に考えるサイト (<https://gjijka.com>)
 - 明治大学科学コミュニケーション研究所 (<https://gjijka.com/sci>)

関連科目 認知情報論 / 現代思想論 / 人類学と意識科学

メッセージ 一般市民の科学理解を向上させる活動を行っています。科学について、特に科学的方法論とその限界について深い理解を目指し、社会的活動をアクティブにできる大学院生を募集しています。

教員一覧

1 情報・社会系

※2024年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。

阿部 力也
ABE Rikiya

博士(法学)
教授 研究分野 刑法



【最終学歴】明治大学大学院 【担当授業科目】現代型犯罪と刑法 【研究テーマ】共同正犯の構造に関する比較法的アプローチ、正犯と共犯の区別問題 【主な著書・論文】『承継的共同正犯の成立範囲について—日高博士の所説を参考にして—』、『日高義博先生古稀祝賀論文集(上巻)』(2018年・成文堂)523-524頁 / 『共同正犯の帰属原理—行為帰属説の再検討—』、『法律論叢』89巻2・3合併号(2017年・明治大学法律研究所)1-21頁 / 『承継的共同正犯について—部分的肯定説の再検討—』、『川端博先生古稀祝賀記念論文集(上巻)』(2014年・成文堂)531-556頁 / 『刑法総論講義案』阿部力也(2019年・成文堂)1-183頁、その他

今村 哲也
IMAMURA Tetsuya

博士(法学)
教授 研究分野 知的財産法



【最終学歴】早稲田大学大学院 【担当授業科目】知的財産法 【研究テーマ】過去のコンテンツ資産の権利処理の円滑化と利用促進に関する総合的研究 / 地理的表示の保護に関する研究 【主な著書・論文】『地理的表示保護制度の生成と展開』(弘文堂、2022年) / 『拡大集中許諾制度導入論の是非』(中山信弘他編)『しなやかな著作権制度に向けて—コンテンツと著作権法的作用』(信山社、2017年) / 『著作権者不明等の場合の裁定制度の在り方について』(論究ジュリスト9号p.173、2014年)

清原 聖子
KIYOHARA Shoko

博士(法学)
教授 研究分野 アメリカ政治、情報政策論



【最終学歴】慶應義塾大学大学院 【担当授業科目】現代政治学 【研究テーマ】アメリカ政治とメディア、大統領選挙キャンペーン 【主な著書・論文】『教養としてのアメリカ研究』(編著、大学教育出版、2021年) / 『フェイクニュースに震揺する民主主義—日米韓の国際比較研究』(編著、大学教育出版、2019年) / 『ネット選挙が変える政治と社会—日米韓に見る新たな「公共圏」の姿』(共編、慶應義塾大学出版会、2013年) / 『インターネットが変える選挙—米韓比較と日本の展望』(共編、慶應義塾大学出版会、2011年)

後藤 晶
GOTO Akira

博士(情報コミュニケーション学)
准教授 研究分野 行動経済学・社会情報学・実験 / 計算社会科学



【最終学歴】明治大学大学院 【担当授業科目】行動経済学 【研究テーマ】ゲーム実験による自発的貢献行動の研究、行動経済学の社会実装に関する研究 【主な著書・論文】人間は「人工知能」と「協力」できるか: クラウドソーシングを用いた仮想的AIエージェント実験による検討 社会情報学 12(1), pp.1-17, 2023 / 被監視感が主観的幸福度・社会的選好に与える影響: クラウドソーシングを用いた実験から 社会情報学 11(3), pp.1-17, 2023 / ビッグデータ時代の経済ゲーム実験: クラウドソーシングを用いた大規模公共財ゲーム実験の実施 情報処理学会論文誌 62(5), pp.1246-1260, 2021

小林 秀行
KOBAYASHI Hideyuki

博士(社会情報学)
准教授 研究分野 災害社会学、災害情報論



【最終学歴】東京大学大学院 【担当授業科目】災害社会学 【研究テーマ】防災・減災、災害復興、災害情報、記憶と継承 【主な著書・論文】(著書)小林秀行、2020、『初動期大規模災害復興の実証的研究』(東信堂 / 論文)小林秀行(2023)『災害における「想起の場」—戦争の記憶・継承研究を手がかりとして—』、『災害情報』21(2), pp.121-132 / 小林秀行(2023)『災害から「癒える」空間としての「想起の場」』、『災害復興学会論文集』22号, pp.1-12 / 小林秀行(2023)『可視化される「助」行為の被傷性—「絆」と「共助」を手掛かりとして—』、『災害情報』21(1), pp.23-34

島田 剛
SHIMADA Go

博士(学術) 教授
研究分野 **国際経済学、開発経済学、国際関係論・国際協力**


【最終学歴】早稲田大学大学院 **【担当授業科目】**開発経済学
【研究テーマ】開発経済、産業開発、ソーシャルキャピタル、国連研究、災害復興 **【主な著書・論文】**島田 剛(2023)『ミクロ経済学への招待』新世社。Shimada, Go. 2022. "The Impact of Climate-Change-Related Disasters on Africa's Economic Growth, Agriculture, and Conflicts: Can Humanitarian Aid and Food Assistance Offset the Damage?" International Journal of Environmental Research and Public Health 19 (1):467.



清水 晶紀
SHIMIZU Akinori

准教授
研究分野 **行政法学、環境法学**


【最終学歴】上智大学大学院 **【担当授業科目】**環境行政法
【研究テーマ】行政活動の不作为に対する法的統制、原子力行政の実態分析とその法的統制 **【主な著書・論文】**『環境リスクと行政の不作为』(単著、信山社、2024年刊行予定)／『環境法の開拓線』(編著、第一法規、2023年)／『ふくしま原子力災害からの複線型復興』(編著、ミネルヴァ書房、2019年)



鈴木 健人
SUZUKI Taketo

博士(政治学) 教授
研究分野 **国際関係論研究、国際安全保障、冷戦史、アメリカ外交**


【最終学歴】学習院大学大学院 **【担当授業科目】**国際関係論
【研究テーマ】G・ケナンに封じ込め構想の研究、および米英同盟とその世界戦略を中心に冷戦史を研究 **【主な著書・論文】**『米中争覇とアジア太平洋: 関与と封じ込めの二元論を超えて』(共編著・有信堂・2021年)／『封じ込め』構想と米国世界戦略—ジョージ・F・ケナンの思想と行動、1931年～1952年』(単著・溪水社・2002年)／『問題解決のコミュニケーション: 学際的アプローチ』(共著・白桃書房・2012年)／『国際関係論と歴史学の間で—斎藤孝の人と学問』(共著・彩流社・2012年)



鈴木 雅博
SUZUKI Masahiro

博士(教育学) 准教授
研究分野 **学校組織研究、教育社会学、教育経営学、教育行政学、エスノメソドロジー**


【最終学歴】東京大学大学院 **【担当授業科目】**学校社会学
【研究テーマ】学校組織における教師間相互行為分析 **【主な著書・論文】**鈴木雅博「校則を決定・運用する教師たち: 何がどのように語られているのか」「だれが校則を決めるのか: 民主主義と学校」(岩波書店・49-74頁・2022年)／『学校組織の解剖学: 実践のなかの制度と文化』(勁草書房・2022年)／『これからの教師研究: 20の事例にみる教師研究方法論』(共著・東京図書・2021年)／『学校研究における組織エスノグラフィーの現在』(『社会と調査』(26)、28-35頁・2021年)



大黒 岳彦
DAIKOKU Takehiko

教授
研究分野 **メディア、情報社会の哲学的思想的研究**


【最終学歴】東京大学大学院 **【担当授業科目】**メディア技術と社会 **【研究テーマ】**身体メディア論、電子メディア論を軸とした「メディアの基礎理論」の構築 **【主な著書・論文】**『(メディア)の哲学—ルーマン社会システム論の射程と限界』(NTT出版)／『謎としての“現代” —情報社会時代の哲学入門』(春秋社)／『「情報社会」とは何か?—(メディア論への前哨)』(NTT出版)／『情報社会の(哲学)—グーグル・ビッグデータ・人工知能』(勁草書房)／『ヴァーチャル社会の(哲学)—ビットコイン・VR・ポストウルース』(青土社)



竹中 克久
TAKENAKA Katsuhisa

博士(学術) 教授
研究分野 **理論社会学／組織研究**


【最終学歴】神戸大学大学院 **【担当授業科目】**組織社会学
【研究テーマ】組織とコミュニケーションの理論的考察／組織における文化とシンボルの社会学的研究 **【主な著書・論文】**『組織の理論社会学—社会・コミュニケーション・人間』(単著・文真堂・2013年)／『組織文化研究における批判的経営研究(CMS)の可能性—組織文化の「負」の側面の分析に向けて』『現代社会学理論研究』11／『組織秩序の形成と解体を説明するオルタナティブ—組織目的、組織文化、そして組織美学』『組織科学』41(2)



田村 理
TAMURA Osamu

博士(法学) 教授
研究分野 **憲法学、フランス憲法史**


【最終学歴】一橋大学大学院 **【担当授業科目】**憲法史 **【研究テーマ】**フランス革命期における憲法が、政治・社会・文化に与えた影響の研究 **【主な著書・論文】**『投票方法と個人主義—フランス革命にみる「投票の秘密」の本質』(2007年・創文社)／『フランス革命と財産権—財産権の「神聖不可侵」と自然権思想』(1997年・創文社)



塚原 康博
TSUKAHARA Yasuhiro

博士(経済学) 教授
研究分野 **高齢社会の公共政策／人間行動の経済学**

【最終学歴】一橋大学大学院 **【担当授業科目】**公共政策 **【研究テーマ】**デジタル化、グローバル化、少子高齢化社会における公共政策の実証分析 **【主な著書・論文】**『人間行動の経済学』(日本評論社・2003年)／『高齢社会と医療・福祉政策』(東京大学出版会・2005年)／『医師と患者の情報コミュニケーション』(業事日報社・2010年)／『日本人と日本社会』(文真堂・2022年)



中里 裕美
NAKAZATO Hiromi

博士(社会学) 准教授
研究分野 **経済社会学、社会ネットワーク論、地域研究**


【最終学歴】立命館大学大学院 **【担当授業科目】**経済社会学
【研究テーマ】新しい経済社会学にもとづく地域通貨の社会ネットワーク分析 **【主な著書・論文】**“Joining policy forums together to develop Ki-no-Eki, a community currency system for forest management in Japan: Dynamics of policy communication networks,” *Land*, 2022 (with Izumi, R. & Lim, S). / “Interplay between social support tie formations and subjective mental health conditions in a community currency system in Japanese disaster-affected communities: The ambivalent effects of social capital,” *Int J. of Disaster Risk Reduction*, 2020 (with Lim, S).



山内 勇
YAMAUCHI Isamu

博士(経済学) 准教授
研究分野 **イノベーションの経済学**


【最終学歴】一橋大学大学院 **【担当授業科目】**イノベーションの実証分析 **【研究テーマ】**日本企業のイノベーション・マネジメント、知的財産制度の実証分析 **【主な著書・論文】**“An economic analysis of deferred examination system: Evidence from a policy reform in Japan,” *International Journal of Industrial Organization*, 39, pp.19-28, 2015 (with Sadao Nagaoka). / “Does the outsourcing of prior art search increase the efficiency of patent examination? Evidence from Japan,” *Research Policy*, 44, pp.1601-1614, 2015 (with Sadao Nagaoka).



山崎 浩二
YAMAZAKI Koji

博士(工学) 准教授
研究分野 **VLSIの故障検査に関する研究**

【最終学歴】明治大学大学院 **【担当授業科目】**情報科学 **【研究テーマ】**VLSIの論理故障に対する診断手法の研究 **【主な著書・論文】**“Diagnosing Resistive Open Faults Using Small Delay Fault Simulation,” *Proc. ATS*, 2013.



2 メディア・文化系

※2024年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。

江下 雅之
ESHITA Masayuki

教授
研究分野 社会ネットワーク論/メディア史/
ポピュラー文化/女性誌史



【最終学歴】エッセック経済商科大学大学院 【担当授業科目】メディア社会史 【研究テーマ】メディア史/雑誌のソーシャル・メディア的機能/ユース・サブカルチャーズとメディアの関係/日仏の女性誌史比較 【主な著書・論文】『ネットワーク社会の深層構造—「薄口」の人間関係へ』(中央公論新社・2000年)/『リンク格差社会』(毎日コミュニケーションズ・2007年)/『ESHITA Masayuki, "Magazines féminines : la mode de la vie et les réseaux interpersonnels par intermédiaire de média", Towards the era of genuine mobility, DI Academy Press, 2019.』

高馬 京子
KOMA Kyoko

博士(言語文化学) 教授
研究分野 超域文化論、言語文化学、
メディア言説分析、文化記号論



【最終学歴】大阪大学大学院 【担当授業科目】超域文化論/集約型外国文献講読(フランス語) 【研究テーマ】クリティカルファッションスタディーズ、日本とフランスにおけるファッションとジェンダー表象 【主な著書・論文】『kawaii論(仮)』(単著、明石書店、近刊)/『越境するファッションスタディーズ』(共編著・ナカニシヤ出版・2021年)/『Rethinking Fashion Globalisation』(共著・Bloomsbury・2020年)/『叢書セミオトポス14号』転生するモード:デジタルメディア時代のファッション』(特集編集)(共著・新曜社、2019年)/『コミュニケーションテキスト分析』(共訳訳書・ひつじ書房・2018年)

須田 努
SUDA Tsutomu

博士(文学) 教授
研究分野 社会文化史・
異文化コミュニケーション史・民衆史



【最終学歴】早稲田大学大学院 【担当授業科目】社会文化史 【研究テーマ】日本近世・近代における社会文化と民衆思想/暴力の社会史/日朝異文化交流史 【主な著書・論文】『「悪党」の一世紀』(青木書店・2002年)/『アイコンの崩壊まで』(青木書店・2008年)/『幕末の世直し』(吉川弘文館・2010年)/『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』(編著・岩波書店・2014年)/『吉田松陰の時代』(岩波書店・2017年)/『三遊亭円朝と民衆世界』(有志舎・2017年)/『幕末社会』(岩波新書・2022年)/『現代を生きる日本史』(岩波現代文庫・2022年)/『社会変容と民衆暴力』(大月書店・2023年)

関口 裕昭
SEKIGUCHI Hiroaki

博士(文学) 教授
研究分野 近現代ドイツ文学文化(音楽・美術も
含む)/ユダヤ文化史/日独比較文学



【最終学歴】慶應義塾大学大学院/京都大学大学院 【担当授業科目】比較文学・比較文化 【研究テーマ】ドイツ近現代史におけるユダヤ人問題について多角から研究 【主な著書・論文】『パウル・ツェランとユダヤの傷—《間テクスト性》研究』(単著・慶應義塾大学出版会・2011年・運動駁台学会学術賞)/『評伝パウル・ツェラン』(慶應義塾大学出版会・2007年・小野十三郎賞記念特別賞)/他に編著として『生誕200年 ローベルト・シューマン—言葉と音楽』『日本文化におけるドイツ文化受容』(ともに日本独文学会研究叢書)など

田中 洋美
TANAKA Hiromi

博士(社会学) 准教授
研究分野 ジェンダー研究、
メディア/文化研究



【最終学歴】ルール大学(ドイツ) 【担当授業科目】ジェンダー論 【研究テーマ】メディア、テクノロジーのジェンダー分析 【主な著書・論文】『デジタル社会の多様性と創造性』(共編著・明石大学出版会・2023年)/『How Nissin represented Naomi Osaka: Race, gender, and sport in Japanese advertising.』Communication & Sport, 2022. (共著)/『クリティカル・ワード メディア論』(共著・フィルムアート社・2021年)など

波照間 永子
HATERUMA Nagako

博士(学術) 教授
研究分野 舞踊学/身体表現論/芸術実践論



【最終学歴】お茶の水女子大学大学院 【担当授業科目】表象文化論 【研究テーマ】東アジア舞踊の比較研究/舞踊家オーラル・ヒストリー 【主な著書・論文】『琉球王府編纂『おもろさうし』の舞踊譜と詞章』(『比較舞踊研究』第28巻・2022年)/『琉球古典舞踊《四つ竹》の創造と伝承:近世琉球王府による演出の特性』(『舞踊学』43号・2020年)/『志田房子作 琉球舞踊《鎮魂の詞》の表象—空間・音・身体の重層性』(『比較舞踊研究』第25巻・2019年)/『男芸』から『女芸』へ—女性舞踊家のオーラル・ヒストリー』(『舞踊学』38号・2015年)

日置 貴之
HIOKI Takayuki

博士(文学) 准教授
研究分野 演劇学・日本演劇研究



【最終学歴】東京大学大学院 【担当授業科目】演劇学 【研究テーマ】江戸時代後半から明治時代の演劇(歌舞伎)における災害や戦争の描写など 【主な著書・論文】『変貌する時代のなかの歌舞伎 幕末・明治期歌舞伎史』(単著、笠間書院、2016年)/『真山青果とは何者か?』(共編、文学通信、2019年)

横田 貴之
YOKOTA Takayuki

博士(地域研究) 教授
研究分野 中東地域研究、現代中東政治、
比較政治学、国際関係論



【最終学歴】京都大学大学院 【担当授業科目】宗教と政治 【研究テーマ】現代中東政治、イスラーム主義研究 【主な著書・論文】『原理主義の潮流—ムスリム同胞団』(山川出版社・2009年)/『現代エジプトにおけるイスラームと大衆運動』(ナカニシヤ出版・2006年)/『中東・イスラーム研究概説—政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』(共編著・明石書店・2017年)/『途上国における軍・政治権力・市民社会—21世紀の「新しい」政軍関係』(共著・見洋書房・2016年)

3 人間・コミュニケーション系

※2024年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。

石川 幹人
ISHIKAWA Masato

博士(工学) 教授
研究分野 人工知能論/科学技術社会論



【最終学歴】東京工業大学大学院 【担当授業科目】認知情報論 【研究テーマ】意識や心の自然科学的かつ哲学的究明、および疑似科学論、科学コミュニケーション、科学リテラシー教育 【主な著書・論文】『心と認知の情報学—ロボットをつくる・人間を知る』(勁草書房・2006年)/『だまされ上手が生き残る—入門! 進化心理学』(光文社新書・2010年)/『超心理学』(紀伊國屋書店・2012年)/『なぜ疑似科学が社会を動かすのか』(PHP新書・2016年)

岩淵 輝
IWABUCHI Akira

博士(薬学) 教授
研究分野 生命論/生命思想史




【最終学歴】東京大学大学院 【担当授業科目】生命論 【研究テーマ】生命観の歴史/生命の哲学/グスタフ・フェヒナーの精神物理学 【主な著書・論文】『生命(ゼーレ)の哲学: 知の巨人フェヒナーの教育なる生涯』(単著・春秋社・2014年)/『フェヒナーの自然科学的美学と森鷗外—明治期日本の美学移入の一断面』(単著・『科学史研究』Vol.56, No.282, pp.86-105・2017年)

坂本 祐太
SAKAMOTO Yuta

Ph.D. in Linguistics
准教授

研究分野 **言語学 (生成文法理論・統語論)**

【最終学歴】米国コネチカット大学大学院 **【担当授業科目】**言語学 **【研究テーマ】**自然言語における照応現象に関する比較統語論的研究 **【主な著書・論文】**Sakamoto, Yuta. In press. NEG-raising via Proform. Linguistic Inquiry. / Sakamoto, Yuta. 2020. Silently Structured Silent Argument. Amsterdam: John Benjamins. / Sakamoto, Yuta. 2019. Overtly Empty but Covertly Complex. Linguistic Inquiry 50:105-136.




施 利平
SHI Liping

博士 (人間科学)
教授

研究分野 **家族・親族の構造と関係**

【最終学歴】大阪大学大学院 **【担当授業科目】**家族社会学 **【研究テーマ】**夫婦の伴侶性、親子・親族関係の歴史的・国際的比較 **【主な著書・論文】**『戦後日本の親族関係—核家族化と双系化の検証』(勁草書房・2012年) / 『現代中国家族の多面性』(共著・弘文堂・2013年) / 『日本の家族 1999-2009—全国家族調査[NFRJ]による計量社会学』(共著・東京大学出版会・2016年)



鈴木 健
SUZUKI Takeshi

Ph.D.
教授

研究分野 **メディア批評とカルチュラル・スタディーズ / 政治コミュニケーション**

【最終学歴】ノースウエスタン大学大学院 **【担当授業科目】**説得コミュニケーション論 **【研究テーマ】**メディア批評 / アメリカと日本の政治コミュニケーション論 **【主な著書・論文】**『説得コミュニケーション論を学ぶ人のために』(共著・世界思想社・2009年) / 『政治レトリックとアメリカ文化』(朝日出版社・2010年) / Political Communication in Jaoan: Democratic Affairs and the Abe Years (Cambridge Scholars・2023年) / その他、翻訳書に『ポップ・カルチャー批評の理論: 現代思想とカルチュラル・スタディーズ』(小島遊書房・2023年)




根橋 玲子
NEBASHI Reiko

Ph.D.
教授

研究分野 **コミュニケーション学 (異文化間コミュニケーション)**

【最終学歴】ミシガン州立大学大学院 **【担当授業科目】**異文化間コミュニケーション **【研究テーマ】**異文化理解・多文化共生・移動する人々の生活とキャリア **【主な著書・論文】**『コミュニケーション学入門』(共著・放送大学出版会・2019年) / 『日本で就職している元留学生の中国人女性のライフキャリア形成』『現代女性とキャリア』(10), 47-60 (共著・2018年) / 『Relationships & Communication in East Asian Cultures: China, Japan and South Korea』(共著・Kendall Hunt・2016年) / 『ブラジル人生徒と日本人教員の異文化間コミュニケーション』(共著・風間書房・2011年)



蛭川 立
HIRUKAWA Tatsu

准教授

研究分野 **人類学 / 意識研究**

【最終学歴】東京大学大学院 **【担当授業科目】**人類学と意識科学 **【研究テーマ】**変性意識状態と変則的体験、シャーマニズムや瞑想などの身体技法とそのコスモロジー **【主な著書・論文】**『彼岸の時間—(意識)の人類学』(春秋社・2009年) / 『精神の星座』(サンガ・2011年)




宮本 真也
MIYAMOTO Shinya

教授

研究分野 **社会学 / 社会哲学**

【最終学歴】大阪大学大学院 **【担当授業科目】**現代思想論 / 集約型外国文献講読(ドイツ語) **【研究テーマ】**承認とコミュニケーションを軸とした批判的社会理論、社会的な病理の分析・批判 **【主な著書・論文】**『理性のコミュニケーション』(『コミュニケーション社会学入門』伊藤公雄編・世界思想社, pp. 195-219・2010年)



山口 生史
YAMAGUCHI Ikushi

博士(学術)
教授

研究分野 **コミュニケーション学 (組織コミュニケーション) / 組織行動学**

【最終学歴】国際基督教大学大学院 **【担当授業科目】**組織コミュニケーション論 **【研究テーマ】**組織コミュニケーション学と組織行動学の関連 **【主な著書・論文】**Mediating effects of upward communications on the relationship between team autonomy and burnout: A study of employees at care facilities in Japan. *International Journal of Business Communication*, 2019 (https://doi.org/10.1177/2329488419829811) / 『ビジネス心理: マネジメント心理編』(共監修・中央経済社・2013年) / 『成果主義を活かす自己管理型チーム』(編著・生産性出版・2005年) / 『従業員動機づけのための異文化間コミュニケーション戦略』(同文館・1998年)



脇本 竜太郎
WAKIMOTO Ryutarou

博士(教育学)
准教授

研究分野 **社会心理学**

【最終学歴】東京大学大学院 **【担当授業科目】**社会心理学 **【研究テーマ】**防衛性と社会的行動の関連、子育てについての信念 **【主な著書・論文】**Reconstruction of the subjective temporal distance of past interpersonal experiences after mortality salience. *Personality and Social Psychology Bulletin* (37), pp.687-700, 2010. / なぜ人は困った考えや行動にとらわれるのか? - 存在脅威管理理論から読み解く人間と社会, ちとせプレス, 2019. / 存在論的恐怖が達成事象の主観的時空間的距離に及ぼす影響: 自己高揚と一貫性希求の比較検討 *情報コミュニケーション学研究* 18, 131-144, 2018

